

すぎのこ



尚綱大学附属こども園
尚綱大学附属こども園

あけましておめでとーじーづいます

新春のお喜びを申し上げます。

昨年は大変お世話になりました。年末年始は、お子様はどのよう
に過ごされたでしょうか。お正月休
みが終わり、徐々に日常に戻ってき
た今日この頃、体調を崩しやすい
時期でもあります。園での生活に
スムーズに戻るよう、おうちで
のご協力をよろしくお願いいたします。
す。

新年がスタートし、今年度も残
り三か月となりました。三学期は
祖父母や地域のみなさまと触れ合
いながら昔遊びを体験する「新春
のつどい」や観劇会、節分、生活発
表会など園児の心に残るであろ
うい
ろな行
事があ
りま
す。職
員一同



身の引き締まる思いです。本年も
保護者の方々と、園児の成長の喜
びを分かち合いながら、心温まる
一年を過ごしていきたいと思いま
す。どうぞよろしく願っています。

「遊び」で育てた い力とは

義務教育では「学習」し「学力」
を高めるために学校に通います。
就学前の園生活では、どこの園で
も「遊び」が中心となります。

私も以前はそうでしたが、「園児
は遊んでばかりでいいなあ」「た
だ遊ぶだけ」というふうに思われ
がちではないでしょうか。

「すぎのこ」七月号でもお知ら
せしたように「遊び」は「学び」で

す。そのことを少し詳しく
お伝えできればと思いま
す。

園での「遊び」は、近年
「非認知能力」という言葉と
ともにその重要性が明らか
になってきました。

「非認知能力」とは、一言で
いえば、テストや試験では図ること
ができない「人間力」や「生きる
力」のことです。逆に「認知能力」と
は「読み書き計算」に代表される目
に見える力のことです。

例えば漢字の力、つまり認知能
力はテストをすれば結果が分か
りますが、「非認知能力」はこの人の
『思いやり』は何点か。と問われて
「困っている人に日ごろよく声をか
けているが、先日電車でお年寄り
に席を譲れなかったから九十点。」
などと点数を付けられるものでは
ありません。しかし生きていくう
えでとても大切な力であることは
間違いないでしょう。このように目
には見えない、点数化はできないけ
れども人が幸せに生きていくうえ
で必要な力があります。それが「非
認知能力」といわれるものです。

その力はある特別なトレーニング
をすれば身につくというものでは

はなく、日常生活の中で、そして
園生活の中で「子どもの発達に必
要な経験」をさせることを通して
力をつけていくものといえるかも
しれません。

この「非認知能力」を列記してみ
ると、例えば「思いやり」「正義感」
「自制心」「協調性」「挑戦意欲」
「自立心」「粘り強さ」「自己肯定
感」「共感性」「社交性」などそれは
数え切れません。「認知能力」「読
み書き計算」よりも多岐にわたっ
ているのが感じられることでしょ
う。そして認知能力を一つ一つ身に
付けるようなカリキュラムをつく
ることは非現実的です。「非認知能
力」は一つ一つが独立しているとい
うより、かかわりあっていたり重な
っていたりするものだと思います。



ボールが転がる道を作ろう

また力をつけるべき時期につい
てですが「かけ算は二年生のころ」
と見通しが立ちますが、「非認知能
力」はそれが明確にはわかりませ
ん。あるきっかけでぐんと伸びるこ
ともあれば停滞することもあるで
しょう。表面化はしづらいでし
ょうがその種をまいておくことが園で
の役割ではないかと考えています。
学力の高い子を育てることだけ
では幸せになるために十分でない、
認知能力を高めることに負けず劣
らず、ましてやさらに大切な力が
あることに気づき表舞台に出てき
たといえるかもしれません。

では、なぜ幼児期にこの「非認知
能力」を高めることが大切なので
しょう。

そのことを科学的に研究し証明
したのが二〇〇〇年にノーベル経
済学賞を受賞したジエームスヘッ
クマン博士による「ペリー就学前
プロジェクト」という研究結果で
す。そこでは「乳幼児期に非認知
能力を身に付けておくことが、
大人になってからの幸せな生活
や、経済的な安定につながる」と
いう結論が導かれています。

以下次回に続きます。

(参考資料:「非認知能力が育つこれから
の保育」監修 横山洋子 池田書店 ほか)